

第6章 子どもの頃の読書活動の多さに関連する要因の検討

1. 目的

第4章と5章の結果を整理すると、小中高を通して読書量が多い者（小中高多群）は、意識・非認知能力と認知機能が他の群に比べて高いことが明らかとなった。そこで、小中高多群の者は、どのような読書活動を経験しているのか明らかにすることを目的とした。

2. 方法

前述したマイボイスコム株式会社のモニターである全国の20～60代の男性2,500名、女性2,500名、計5,000名（各年代で男性500名、女性500名）を分析対象とした。次に、小学校高学年における読書活動の経験を独立変数、第5章で用いた小中高多群のクラスターに属するか否か（0=属さない、1=属する）を従属変数とした階層的ロジスティック回帰分析を実施した。具体的には、Step1で性別（0=男性、1=女性）と年齢を投入し、Step2で小学校高学年における読書活動に関する経験を投入した。なお、小学校高学年、中学校、高校の読書活動に関する経験を投入する必要があるものの、独立変数の数が多いことにより解釈が難しくなること、各時期の独立変数間の相関関係による多重共線性の発生を防ぐこと、そして各時期の変数間に有意な相関関係が認められ（ $rs = .20-.81, ps < .001$ ）、小学校高学年の経験がある程度の引き継がれていることを考慮する必要があると考えられた。そこで、初期の経験である小学校高学年の読書活動に関する経験の間で相関係数を算出し、0.5以上（強い相関関係）の数値が得られた場合（Cohen, 1992）、他の変数との相関関係も考慮し、適宜変数を選択することとした。

3. 結果

Step1では性別と年齢に有意な関連がみられ、Cox-Snell R^2 も有意であった。小学校高学年の読書活動に関する経験を投入したStep2では、決定係数で有意な増分が示された。また、小学校高学年の読書活動に関する経験として、絵本を読んだこと、地域の図書館で本を借りたこと、図書委員、「子ども図書」、「読書コンシェルジュ」の活動をしたこと、目次、前書き、解説など本文以外の部分も読むこと、同じ本を繰り返し読むこと、ジャンルを問わず読むこと、それに本を持ち歩いて読むことは小中高多群の有意な発生につながることを示された。一方、学校や市の推薦図書を選ぶこと、著者がどのような人か理解してから読むこと、それに1日に読むページを決めて読むことは小中高多群の有意な抑制につながることを示された。なお分析において、多重共線性は認められなかった（VIF = 1.00-1.80）。

表 6-1. 小中高多群に関連する小学校高学年の読書活動に関する要因 (階層的ロジスティック回帰分析)

変数	Step 1		Step 2	
	OR	95%CI	OR	95%CI
Step 1				
性別	2.16***	[1.87, 2.49]	1.55***	[1.31, 1.82]
年齢	1.01***	[1.01, 1.02]	1.02***	[1.02, 1.03]
Step 2				
家族から昔話を聞いたこと			1.12	[0.99, 1.26]
絵本を読んだこと			1.14*	[1.01, 1.28]
マンガを読んだこと			0.94	[0.84, 1.05]
地域の図書館で本を借りたこと			1.70***	[1.52, 1.89]
数人で集まって本の感想を話し合ったこと			0.99	[0.82, 1.21]
図書委員、「子ども図書」、「読書コンシェルジュ」の活動をしたこと			1.26***	[1.07, 1.48]
友達、家族、先生からのすすめを参考にすること			1.10	[0.95, 1.28]
書店の広告やポスターを参考にすること			1.16	[0.96, 1.42]
学校や市の推薦図書を選ぶこと			0.86*	[0.74, 0.99]
著者がどのような人か理解してから読むこと			0.79*	[0.64, 0.96]
目次、前書き、解説など本文以外の部分も読むこと			1.34***	[1.17, 1.53]
同じ本を繰り返し読むこと			1.57***	[1.39, 1.78]
ジャンルを問わず読むこと			1.59***	[1.39, 1.83]
気になるページだけ読むこと			0.92	[0.78, 1.08]
1日に読むページを決めて読むこと			0.68***	[0.57, 0.82]
読んだ本の映画等をみること			0.92	[0.75, 1.11]
本を持ち歩いて読むこと			1.92***	[1.67, 2.20]
	R^2	.05***		.32***
	Cox-Snell R^2	.03***		.20***
	ΔR^2			.27***

Note. OR : オッズ比、95%CI : 95%信頼区間, *: $p < .05$, ***: $p < .001$

4. 考察

読書を好む子どもの要因を質的に検討した先行研究は、年齢や興味のある本を簡単に入手できるようにすること、家族で読んだ本について会話をすること、同じような関心を持つ仲間がいることが積極的な読書活動につながることを報告している (e. g., Mansor et al., 2013; Strommen & Mates, 2004)。分析の結果、関連する要因として抽出された絵本を読んだこと、地域の図書館で本を借りたことは、年齢や興味にあった本を簡単に入手できる環境にいることを示唆しており、図書委員、「子ども図書」、「読書コンシェルジュ」の活動をしたことは、他者との活動であるため、先行研究の結果を支持していると考えられる。また、目次、前書き、解説など本文以外の部分も読むこと、同じ本を繰り返し読むこと、ジャンルを問わず読むこと、それに本を持ち歩いて読むことは先行研究では指摘されていない新たな知見であり、上記の取り組みを可能とする体系を整えることの重要性を示していると考えられる。一方、整える際、学校や市の推薦図書を選ぶこと、著者がどのような人か理解してから読むこと、それに1日に読むページを決めて読むことは、本の内容や興味とは離れた内容であり、その点を強調することは好ましくない影響を及ぼす可能性があるため、注意が必要である。しかしながら、上記の変数はあくまでクラスターとの関連を直接的に検討したに過ぎないため、どのようにこれらの経験をすることが注意する必要があるか、詳細に検討することが求められる。

以上のことから、小中高の積極的な読書活動につなげるためには、いくつかの経験が重要な役割を果たすことが示唆された。しかしながら、子どもの頃の読書量は、回顧的評価を用いているため、因果関係について強く述べることは難しい。また、子どもの頃の読書量を主観的に評価しているため、その評価は正確性に欠ける可能性がある。加えて、分析において性別と年齢を統制したが、それ以外の要因がクラスターに影響を及ぼしている可能性があるため、解釈には注意が必要である。